薬剤部季刊誌　37 号　2015 年 9 月発行

くすり 箱

発行
桐生厚生総合病院　薬剤部
発行責任者　小林 真弓
編集担当者　金子 康子
矢古宇 由佳
小島 強

第 37 回目のテーマは"熱性けいれん"についての紹介です。

熱性けいれんとは

乳幼児期のお子さんによく見られる発熱（通常 38 度以上）を伴うけいれんのことです。子どもの脳は熱に弱く、風邪などの熱でもけいれんを起こします。

日本の子どもでは 5％以上が経験する頻度の高い病気です。多くは治療を必要としない予後の良好な病気で、後遺症などは残りません。

親や兄弟に熱性けいれんの既往があると再発する可能性が高くなると言われています。

症状

熱性けいれんは熱の上がり際に多く、突然意識がなくなり、白目をむいて身体をそらせるように硬くしたり、手足をガクガク震わせます。顔色が悪くなり、時に紫色になります。吐いたりすることもあります。たいてい、けいれん症状は左右対称ですが、まれに左右いずれか一方の症状が強いことがあります。また、発作前に一瞬、ボーッとしていることもあります。

けいれんは数分から 5 分以内で止まることが多く、いったん意識が戻って（泣いて）その後寝ますが、まれに 15 分以上続く場合もあります。

けいれんが起きた時の対応

1. 慌てない

大切なのは慌てないことです。けいれんは通常、数分以内で止まり、命にかかわることや後遺症を残すことはまずありませんので、冷静に対処してください。

2.　体を横にする以外は何もしない

　嘔吐した場合、嘔吐物を間違って気道の方へ吸い込んでしまう危険がありますので、体を横に寝かせ、衣服をゆるめて楽な姿勢にしてあげましょう。舌を噛まないように物をくわえさせることは全く無用で、かえって口の中を傷つけることがあります。また、大声で名前を呼んだり、体を揺すったりして大きな刺激を与えることもよくありません。

3.　じっと見る

　あとでけいれんの様子を説明できるように、よく観察してください。

主な観察のポイント

- 体温
- 顔色
- 目の動き
- 手足のつっぱり方
- けいれんの左右差
- けいれんの起きていた時間

熱性けいれんの治療・予防

　熱性けいれんとわかっている場合は、数分で治まるので特に治療を必要としません。

　予防法として、ダイアップ（ジアゼパム）というけいれんを抑える坐薬を発熱時に使用することがあります。

　熱性けいれんは熱が上がるときに多いので、37.5 度程度の時にダイアップ坐剤を使用し、8 時間後に発熱が続いている時には再度使用します。

　解熱薬の坐剤を併用する場合は、ダイアップ坐剤の吸収が阻害される可能性がありますので、ダイアップ坐剤の使用を優先し、30 分以上経過してから解熱薬の坐剤を使用してください。

　熱性けいれんの予防を行うかどうかは、けいれんの頻度、持続時間、年齢などで変わってきますので、医療機関で相談しましょう。

　お子さんが発熱して突然けいれんを起こすと、驚いてパニックを起こしてしまう人も少なくありません。

　いざという時落ち着いて対処できるように、正しい知識を身につけておきましょう。

次回は、2015 年 12 月発行予定です。